関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

[書評] 『近代日本社会運動史人物大事典』

著者	杉原 四郎
雑誌名	關西大學經済論集
巻	47
号	6
ページ	821-830
発行年	1998-03-01
その他のタイトル	[Review] Biographical Dictionary of the Social Movements in Modern Japan
URL	http://hdl.handle.net/10112/14087

書　評

『近代日本社会運動史人物大事典』

杉　原　四　郎

1　本書の特色について

『近代日本社会運動史人物大事典』は，大事典と銘うたれているように，全5巻（人名の五十音順にならんだ本文が1～4巻，人名索引が第5巻，合計4350頁）で，全巻同時に1997年1月日外アソシエーツから発行された（発売紀伊国屋書店）。編集委員会（代表いいだもも）56名の姓名は第一巻84頁にある。その中の一人（しまね・きよし，島根清，1931-1987）は，本書のキイ・パースンとしてこの大著を完成にまで導いた人物であり，いわば名誉編集委員であるとされている（同21頁）が，彼の構想していた「日本社会主義人物事典」の素志を継承して，本書の「編集委員会」が創立された1989年4月22日以来の詳細な経過は，巻頭にあるいいだもものの「〔自画自賛〕近代日本を創り出し・近代日本を超え出ようとした1万5千人を記憶する全5巻の紙碑――序にかえて――」にのべられている（「しまね・きよし」は本書にはなぜか独立項目としては出てこなく，わずかに「加瀬菊雄」のなかに1ケ所でてくるだけである）。1万5千人という数字については，別の箇所に「見出し人名で約1万5千名（本4巻），検索可能人名で約6万件名（索引1巻）収録されています」としるされている（第1巻1頁）。また執筆者370名の姓名は同84-86頁にかかげられている。

しまね・きよしの「日本社会主義人物事典」の計画によれば，明治以降何らかの形で社会主義思想運動に接触した体験をもつ人物を，社会主義の分野だけではなく，政治・実業・文化・大学・芸能・評価（ママ）・ジャーナリズムなどのあらゆる分野にわたって収録する。それらの人物の生涯にわたる軌跡を記録すると同時に，研究事典をかねることができるように，関係文献・参考資料をできるだけ広汎に収録する。記述の形式としては，必ずその人物と社会主義との接点を明記し，それと無縁な分野に進んだ人物の場合には，その社会主義体験がその後の人生にどのような野望をあ

たえ，その痕跡をどのように残しているかを分析する（同34-35頁）。本書はこうしたしまねの編集方針を継承しつつ収録の人名を増大していった。その結果としてタイトルも「日本社会主義人名事典」から「近代日本社会運動史人名大事典」に成長転化したのである。

そのような収録人名の拡大を通じて，いいだは「労農運動」，「無産者運動」はもとより，「在日朝鮮人，在日中国人・台湾人，沖縄，奄美，アイヌ，部落，女性……の社会運動家を重点的に発掘し収録しましたが，そのさい，できうるかぎり代行主義を排して，エスニシティー問題・差別問題のシーリアスな領域にふさわしい当事者が編集委員・執筆者として当たることにしました」と書いている。いいだはまた，海外で活動した日本人「移民」「亡命者」や逆に「日本に来た革命家」――いいだは木村毅の「日本は革命家の亡命地として，スイスのジュネエヴ，ローザンヌ，イギリスのロンドンにつぐほどの役割を果している」という名言を紹介している――の多くを収録したこと，とくにロシアに亡命して，「スターリン粛清体制下にそのほとんどが非業の死をとげるにいたった日本人共産主義者の事跡を，全面的に掘り起こしたことは，この大事典がはじめてなしとげた偉業と自負します」とのべている（同7頁）。

なお全体の編集が37グループに分節化されているが，グループ名とそこに収録された人物数とそのグループの責任者名はつぎのごとくである。

1	両毛騒動	64名	田村紀雄
2	自由民権	174名	新井勝紘
3	政党事始・普選	30名	和田守
4	農民運動	628名	安田常雄
5	学生運動	288名	笠井忠・本村四郎
6	青少年運動	40名	安田常雄
7	都市化運動	160名	渡辺一衛
8	消費組合	58名	丸山睦男・こんのそう
9	アナキズム	943名	萩原晋太郎・向井孝・星野準二・寺島珠雄
10	水平社	179名	秋定嘉和
11	右翼	128名	笠井忠
12	救援会	24名	市原正恵

13	医療運動	196名	山領健二
14	教育運動	490名	小林千枝子・清水康幸
15	文化・文学	640名	円谷眞護・大和田茂・大場弘幸・沢豊彦
16	思想・哲学	229名	本村四郎・笠井忠
17	宗教・反宗教	127名	本村四郎・大住誠
18	ジャーナリズム	6名	田村紀雄
19	実業家	8名	大野昭男
20	反戦平和運動	178名	安田常雄
21	女性解放	710名	余川典子・市原正恵
22	鉱山運動	179名	村上安正
23	沖縄人	597名	輿石正・伊佐真一・比屋根照夫・宮城晴美・屋敷比収
24	アイヌ	88名	横山孝雄
25	海外活動	59名	田村紀雄
26	エスペランティスト	137名	衣笠弘志
27	在日朝鮮人	1287名	朴慶植
28	在日外国人	41名	伊東昭雄・いいだもも
29	初期社会主義	1381名	堀切利高
30	在日台湾人	52名	伊東昭雄
31	在日中国人	586名	伊東昭雄
32	在ソ「被粛清者」	81名	加藤哲郎
33	無産者運動（無産政党・労働組合）	343名	栗木安延・久保在久・宇木伸夫
34	奄美	368名	松田清
35	風俗・芸能	4名	金子勝昭・玉川信昭
36	城西消費組合	1122名	木浦江理子
37	茨城共産主義運動	130名	湯浅昌子

II　河上　肇の関連項目

河上肇の関連項目をとりあげるのは，河上の活動する期間は，明治の後半から大

正を経て昭和の戦後に及ぶ約50年にわたり，学界のみならずジャーナリズムや政治・社会運動の広い領域におよぶ人々との交流が多く，沖縄や朝鮮・中国の人々との付合いもあるので，本事典の特色をうかがうには格好の項目と思われるからである。独立項目としてとりあげられているのは，河上の親族では妻の秀，次女の芳子，秀の弟の大塚有章，秀の妹婿末川博の4人である。彼らのことは次項にまわし，まず肇本人の項目をみることにしよう。

(1)久保在久の執筆しているこの項目（第二巻165頁）の末尾に，参考文献として，『日本社会運動人名辞典』（青木書店，1979年）と『部落問題事典』（1989年）とがあげられている。前者の「河上肇」の項目と久保の文章を比較すると，それが青木書店の項目に大体のっとって書かれていることがわかる。ただ一つちがうのは，河上が部落問題に関係しているところが青木書店版にはないことである。これはおそらくもう一つの参考文献としてあげられた『部落問題事典』によったものではないかと思われるが，河上の評伝に彼の部落問題へのかかわりをのべたものはすくないから，この点は久保の文章のメリットである。

久保の記述で年月に間違いのある所は，(イ)河上が「日本工業論」を書いたのは12才でなく14才，(ロ)足尾鉱毒地演説会は1901年11月でなく12月，(ハ)彼が助教授になるのは1907年でなく1909年，(ニ)法学博士になるのは1914年10月でなくて11月，(ホ)東京から京都に転居したのは1943年4月でなくて1941年12月であるが，この誤りはすべて青木書店版に基づいている。『河上肇全集』別巻（1986年）にある年表を参照すれば，この事典で青木書店版の誤りを正すことができたのだった。なお記述のうちで，(イ)「1906年2月無我苑を去り，読売新聞記者となった」というのは，河上は無我苑を去るまえの1906年1月にすでに読売新聞に入社したのだから，前後関係から見て不適当な表現であろう。(ロ)1907年4月に『日本経済新誌』を創刊した「このころからマルクス経済学の学問的研究に着手した」とあるが，この頃に河上がマルクス経済学研究をはじめたといえるであろうか。(ハ)「1943年1月から『自叙伝』の執筆に着手」とあるが，1943年5月あるいは11月からではなかろうか。この三点も青木書店版によってのべられたものである。なお，肇の別名の一つを「梅月」としているのは「梅陰」の誤植であろう。

(2)「河上秀」の項は北西英子の担当。1933年1月肇が大塚有章の逮捕の10日後に逮捕され，さらに秋10月に次女芳子が逮捕されたとあるが，肇の逮捕は有章の逮捕（1月5日）の7日後の1月12日であり，芳子の逮捕は9月10日である。また肇・

秀夫妻は「京都法然寺に眠る」とあるが「法然院」の誤植，鈴木「重藏」は「重歳」の誤植。参考文献にあげられている秀の『留守日記』は増補新版が岩波書店から1997年に出た。秀の伝記草川八重子『奔馬河上肇の妻』(角川書店，1996年)も出た。「河上芳子」は市原正恵の担当。芳子の没年は1952とあるが，1949.10.9.で，「新中国成立の三年後」は誤りである。大塚有章の逮捕は前述のように1933年1月4日とあるが1月5日である。

「大塚有章」の項は，栗木安延の担当で，青木書店の『日本社会運動人名辞典』の大塚有章の項とくらべると，大塚ギャング事件について，また大塚の晩年の活動についてよりくわしい記述が見られる。没年が1979とあるが1979.9.8.である。

「末川博」の項目は笠井忠の担当。末川と河上肇・秀との関係は書かれていない。

(3)本書第五巻の人名索引は，ある人物と他の人物との交流ないし相互関係を検索するための工夫がされているのが特色である。「河上肇」の場合は，彼の独立項目の場所を指示する[2] 165(第二巻165頁)のつぎに，[1] 39(赤松五百麿)から[4] 997(和田三次郎)まで118名の人名がならんでいて，その人名の項目に河上肇が登場することを示している。「河上芳子」の場合は大塚有章，田村芳麿，中村経一の3人，「大塚有章」の場合は肇・秀・芳子ら17人，末川博の場合は大塚有章，宮本英脩，住谷悦治ら7人である。

河上肇と関連する118名のうち，大沼晴直の項目に出てくる河上肇は関東労働組合の人で研究者の河上肇とは別人(①，645頁)なのでこれをはぶくと117名の項目に河上が登場することになる。この数字は，幸徳秋水や堺利彦や小田頼造らのように200人をこえる関連項目を持つ人々には及ばぬが，それに次ぐランクに属するといえよう。

117名の内訳は，秀・芳子・大塚有章の縁者；大原孫三郎，大山郁夫，国崎定洞，佐々木惣一，津田青楓，福田徳三，三木清などの友人知己；櫛田民藏，松方三郎，伊藤祐之，長谷部文雄，鈴木安蔵，小林輝次，岩田義道らの門下生；郭沫若，杜国庠(以上中国)，姜恒仁，朴應苞(以上朝鮮)，伊波普献，比嘉春潮(以上沖縄)らの人々にわけられるが，その他に，河上の著書や論文をよんで社会問題・マルクス主義に開眼し，日本各地で諸種の運動に参加した多くの無名の人々がとりあげられている。彼らが出会った河上の著作は，『近世経済思想史論』(羽生三七，朴應苞，和田三次郎)，『貧乏物語』(安達征一，梅原薫，勝月テル，藤岡淳吉，中田哲，中村経一，鈴木正次)，『社会問題管見』(田島ヒデ)，『第二貧乏物語』(太田芳雄，加太

こうじ，倉田履煥，田中正男，蔦本スミエ，浜野清)，『社会問題研究』(浦崎康華，相馬寒六郎，柳沢小恰，寄本司麟，矢後嘉蔵)，『人口問題批判』(足助タツ)，『マルクス主義経済学』(蔵前光家)などである。このような人々が河上の影響をうけて社会運動史上に名をのこすことになったことが具体的に示されたことは，本書が河上研究に提供した大きなメリットといえよう。ここにとりあげた無名の運動家23人について見ると，彼等が影響をうけた河上肇の著書の中で多いのは順に，『貧乏物語』(7)，『第二貧乏物語』(6)，『社会問題研究』(5)であった。私自身本書で最も大きな感銘をあたえられたのは，この河上肇関連項目でよんだ無名の人々の足跡であった。

117人の中ですでに私の知っていた人が独自項目としてとりあげられている場合の文章を読んだ感想を二つ記しておきたい。

その一人は「蟹江誠三」である。蟹江は医師だが，地下潜行中の河上肇を1932年9－12月自宅にかくまった。ところが河上が『自叙伝』で「自己本位の強い不満を書き公表したが，病弱だった蟹江はその記述に大きな衝撃を受けたと伝えられており，その後間もない1947年6月13日病没した」(執筆は山領健二)。私もこの点が気になっていて，以前に「『自叙伝』の人物評価の問題点」という一文をかいた（『河上肇全集月報』36，1986年5月，杉原『読書颯々』，未来社，1987年所収)。その時私は蟹江がどういういきさつで河上をかくまうことになったのかという事情をつまびらかにしえなかったが，この山領の説明ではじめて，蟹江が労働農民党に入党しており，新興医師連盟にも参加して無産者医療運動に関係した人物で，その仲間の上山良治からの依頼で河上にかくれ家を提供したことをはじめて知ったのである。

もう一人は「大門英太郎」である。本書は大門をダイモンと読み，三巻158頁にとりあげている（いいだもも執筆）が，正しくはオオモンと読む。『回想大門英太郎――もう一つの昭和史――』という追悼録が1994年出ており（A5版，189頁，非売品)，それにある年表にいいだの文章も大体よっているが，ただ一つ，「45年，河上会を結成」というのは年表にない。1945年に河上会が結成されることは考えられないことである。私はこの追悼録に「河上肇と大門英太郎」という一文を寄せ，河上の大門にあてた書簡四通（二通は全集刊行後発見）を紹介している。

大門の場合のように，運動史の人々はよく没後に追悼文集（遺稿集をかねることが多い）が出されている。相沢秀一，上杉正一郎，大橋隆憲などがそうで（杉原『思想家の書誌』日外アソシエーツ，1990年，105-7頁)，最近寺島一夫のものが出た。『燭光――佐藤一郎遺稿集――』，編集・発行者佐藤義郎，A5版672頁，非売品，

1996年。杉原四郎「経済学者の追悼文集」,『経済資料研究』第27号,1997年5月参照。

III　其他の諸項目の紹介と検討

本書でとりあげられた項目はすこぶる多彩で,社会運動史の人物としてイメージしにくい意外な人物がとりあげられており,それが本書の一つの,重要な特色となっている。この点を紹介する意味をもふくめ,私の印象にのこった若干の項目をとりあげてみよう。

(1)本書には画家,音楽家,俳優,文学者も多くとりあげられ,その中には沢村貞子,東海林太郎,淡谷のり子など芸能界の人々もいる。そして彼等の反体制・反権力の姿勢が記述されているが,ここではいいだももが執筆した「宮沢賢治」をみてみよう。いいだは宮沢が東北大飢饉下の1926年に羅須地人協会を創設したが,それは「一種のアソシエーション構想,農業コミューン構想」であり,その要は「将来社会において労働が再び非労働の遊戯に『戻る』と二つにあったと思われる」とのべている。そしてこの協会が当時「官憲の看視下に置かれていた」と書いている。また「雨ニモマケズ」はこの羅須地人協会の挫折の産物であったとして,この詩に関する戦後の谷川徹三・中村稔の論争における中村の「評価は動かし難い」としるしている。いいだの文章には,恪好とか中林稔とか賢治の没年が1932年と33年の二通りであったりとかの誤植があるが,本書では河上の場合もそうだが,文章の長い項目には,この程度の誤植が残っていることがよくある。

(2)本書には経済学辞典にも独立項目としては登場しない人物,たとえば和田垣謙三や迫間眞治郎や加田哲二や森本厚吉らがとりあげられて,私には有益であった。ただ本書は学者の場合でも社会運動とのかかわりに重点が置かれているので,その人物の学問的業績については軽視される傾きがあることは,「上原専録」や「岡部利良」や「上杉正一郎」の項目をみてもわかる。法学者の「岡村司」(小泉進執筆)や「宮内裕」(本村四郎執筆)の項目は学問的業績にもふれられていて,私には有益だった。

(3)出版界で活動した人物,とくに左翼系の出版物を刊行した人々が多数とりあげられていることも本書の特色の一つである。ナウカ社の「大竹博吉」,大月書店の「小林直衛」,希望閣の「市川義雄」,叢文閣の「足助孝一」,平凡社の「川合　仁」や「下中彌三郎」,文芸春秋社の「菊地　寛」,共生閣の「藤岡淳吉」,白揚社の中村徳二郎

（独立項目なし）などがそうである。合同出版社の「宮原敏夫」（本村四郎執筆）の項目で私は，早稲田大学に在学中非合法の研究会を組織し，卒業後満州に渡った後，戦後は産別の労働調査協議会で調査資料の出版に従事し，合同出版社の社長として採算のとれにくい左翼出版物刊行を果たしたという宮原の経歴をはじめて知った。

(4)本書の大きな特色の一つは，日本に在住または来訪した多数の外国人を採録していること，とくに中国や朝鮮の出身者でこれまで調査が及ばなかった人々の業績を明らかにしたことである。いいだももは「序にかえて」の中で，「朴慶植編集委員の参加によって，この大事典には，空前というべき，1100名以上を超える在日朝鮮人の人物像が有名・無名を問わず収録されることになりました」とのべ，貴重な「朴慶植コレクション」についてしるしている。私はまた本書ではじめて，戦前の日本にベトナムから民族運動家がやってきてフランスからの独立を画策していることを知った。「ファム・チャン・イエム」，「ファン・チュ・チン」，「ファン・バ・ゴク」，「ファン・ボイ・チャウ」，「ファン・ライ・ルオン」，「ブイ・モン」などが独立項目でとりあげられているが，なかでも近代民族運動の創始者「ファン・ボイ・チャウ」（1867-1940）は，宮永敬和が書いているように，1904年抗佛組織「維新会」を1904年に結成，軍事援助を求めて彼は中国経由で1905年神戸に上陸した。ファンは日本で梁啓超と相談し，大隈重信や犬養毅ら日本の在野政治家にも会ったが，軍事行動のまえに国内で実力を養なうことが重要とする彼らの意見に従い，青年を日本に留学させる方針をとった。その後フランスの弾圧や日仏協約による日本の協力により，ファンのこの方針も挫折，彼は中国革命と協力する武力革命を志すが，これも挫折して失意の中に生涯をとじた。明治以来全体としては脱亜論的コースをたどった日本に対するヴェトナム青年たちの熱い期待があり，日本の中にもアジアとの連帯を指向した動きが本書にも登場する宮崎滔天・龍介らの行動にうかがわれるのを知って，近代日本の歩みをアジアの中において見る意義を考えさせられた。

むすび

『近代日本社会運動史人物大事典』は，従来の社会主義・労働運動史研究では埋没し，忘れ去られていた多くの無名の人々の業績を掘り起したのみならず，沖縄やアイヌや女性や在日外国人のような未開拓な領域にも視野をひろめたものとして，ソ連・東欧の大変動以後の厳しい情勢にも対応する画期的な事典となった。それは「調べる事典」として個々の項目にあたって役立つだけでなく，収録されたすべて

の人物が統一的な視点からえらび出され叙述されたものとして，全体を通読して有益でありかつ魅力ある「読む事典」としてもユニークな内容をもっている。

だが従来の同種の事典の枠や水準をのりこえようとする大胆な挑戦に不可避的に伴う不備や欠陥の克服を，本書を土台としてさらに前進を志す人々にゆだねることになった。『週刊読書人』2181号（1997年4月1日）にのった鶴見俊輔・井上ひさしの対談でも，今後改善されるべき問題点がいくつか提起されているが，最後にそうした問題点を二つ，本稿IIでややくわしく検討した河上肇関係の項目を中心にしるしておくことにしよう。

(1)さきにのべたように，本事典はしまね・きよしの編集方針を継承して，研究者のために役立つために参考文献に関する情報の提供に力を入れることにした。それで各項目の末尾には，原則としてその人物に関する参考文献があげられる以外に，「別途『主要参照資料・文献一覧』を作成し，凡例の末尾に掲げ」ている（第一巻91，94-95頁)。この「文献一覧」は(1)辞典・事典・年表26種，(2)原資料・資料集成および解説24種，(3)運動史28種で，1995年までに刊行されたもの総計78種があげられている。

「河上肇」の項目には，前述のように参考文献として二種の辞典・事典があがっているのだが，すくなくとも『河上肇全集』（全36巻，岩波書店，1982-85年）は是非あげられるべきであろう。山川均や山川菊榮の項目ではそれぞれの著作集をふくめて5点の参考文献があげられているのと，また『日本社会運動人名辞典』の「河上肇」では10点以上の文献があげられているのとくらべると，この事典での参考文献の貧弱さが目立つのである。また「河上秀」の項目にあがっている参考文献二点の他に，ぜひ『河上肇獄中往復書簡集』（上・下，岩波書店，1986年，1987年）を加えてほしかった。それには獄中に送られた河上秀の書簡がはじめて肇の書簡と合せて公表されている（全集にはみられなかった）からである。なお『櫛田民藏』の項目の参考文献も，戦前に出た全集（5巻）と大内兵衛『櫛田民藏』（刊行年が書かれていない）だけで，『日本社会運動人名辞典』の『櫛田民藏』で掲載されている文献よりもすくない。戦前の全集を補強した『櫛田民藏・日記と書簡』（社会主義協会出版局，1984年）は参照してほしかった。その中には河上にあてた櫛田の書簡も収録されていて，河上研究者にとっても有益な資料となっているからである。

(2)さきにのべたように，人名索引で河上の名がでてくる関連項目がわかるのは有益である。ただ河上の項目に出てくるたとえば細迫兼光，小岩井浄など，独立項目

としてあがっている人物でも，その項目の中に河上がでてこない場合には当然関連項目としてはあがってこない。「田口卯吉」のように独立項目となっている場合でも田口のところに[2] 165河上肇として出てこないのは処理上のミスであろう。

河上芳子はその関連項目として3名の名前があがっている。当然に大塚有章，田村芳麿，中村経一の所には河上芳子が関連項目としてあがってくる。だが津田青楓があがっていないのは，やはり処理上のミスであろう。しかし，河上芳子の項目の文章に出てくる人物で，その人が独立項目としてあがっていない場合でも，たとえば蜷川虎三や井上礼子の項目を人名索引でひくと，そこには河上芳子の名前がでてくる。それでは河上芳子の中に出てくる人物のなかで，西川一草亭や井上密や鈴木重歳らは人物索引の中に出てこないのはなぜであろうか。また「河上秀」の場合，羽村静子だけが人名索引に出てきて，大塚慊三郎・静子・武松や河上忠・政男は人名索引に出てこないのはなぜであろうか。社会運動にかかわりのない人物はのせないという原則にてらしてのことかもしれないが，河上肇との関係でいえば羽村静子がとられて河上忠や鈴木重歳がとられず，また河上と関係のふかい著者でいえば，蜷川虎三や脇村義太郎が独立項目としてとられていない（つまり人名のランク分けのC以下と評価された）のはなぜかといった疑問が，人名索引についてうかんでくるのである。

私は岩波書店の『経済学辞典』（第三版）の書評を書いた（関西大学『経済論集』第42巻第2号，1992年6月）時にも，その人名索引にかなり注文をつけたのだが，辞典（事典）の索引の仕上り具合に，その辞典の編者の見識のみならず出版社の力量もまたよくあらわれるものである。

後　記

1．本稿を草するにあたり，資料の蒐集の上で一海知義，桜田忠衛，内藤好子の諸氏にお世話になった。記して感謝する次第である。

2．本書に独立項目として出てくる関西大学関係者は，河上の他に，岩崎卯一，辰巳経世，浪江源治，山村喬，八木沢善次，小岩井浄，灰井正二の7名である。

（日外アソシエーツ株式会社，1997年1月，A5，112＋4238.，98,000円）